恋姫？ハイハイ、童貞乙

ミケネコ三号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恋姫？ハイハイ、童貞乙

【Ｎコード】
Ｎ１１８７ＢＡ

【作者名】
ミケネコ三号

【あらすじ】
ヘーイ！！みんな、白仲だお。
みんなはトラックに轢かれたことはあるかな？
ミンチになった俺は、三国志に来た世界に来たけど、時はまさに世紀末。
モヒカンＡとしてがんばっております。老後のためにバリバリとお金を稼ぐぞ。
ところがだ、何故か降りかかる死亡フラグの山。いや、ねーよ。恋

愛フラグもねーよ。
あと一刀は氏ね。

プロローグ：将来の夢『長生き』

いわゆる、無理ゲーである。

後漢における霊帝の治世。その状況は最悪であった。

外においては、鮮卑族。
檀石槐というチート極まりない指導者が生まれた。
またたく間に、匈奴、烏丸などの他の部族たちを打倒し、その領土を奪いまたたく間にモンゴル高原を統一。
さらに、法を制定して、自国の治安を安定させ、超巨大国家を生み出す。わかりやすく言えば、チンギス・ハーンと同じ大きさの勢力ができたと考えればいいだろう。

……そして、

『ああ、ワイらのことを下に見る漢王朝が気に入らんのじゃあ、どっちが上か下かはっきりしたろやぁあああ！』
『オジキかっこいいです』
『テメエら、漢王朝をボコりにすっぞ！！！死ねやおんどりゃあああああ』

と、気に食わんという理由で漢への略奪を開始。
理由が理由だけに和睦交渉に応じる気持ちゼロ。そんなチート鮮卑族を前に漢王朝の将たちは完膚なきまでに叩き潰され、本当にどうしようもない状況だった。
ゆえに、防衛戦の戦費を下げるわけにはいかない。莫大なお金を払

いながら血を吐きながら走るマラソンタイム、スタートだった。

内においては、権力争い。
清流派、外戚、宦官がくっついたり離れたりしながら、それぞれ国の権力を得て富を得ようとしていた。

……と。いうのは有名だが、そんな事は実は些細なコトである。
党錮の禁や宦官の悪政、そんな事より切実な問題があった。どうしようもない問題があったのだ！！

政治が何だとか、いう以前に。

『金がない！！政治を行えるだけの金がない』

朕が使ったから無くなったんではない、もともと、無かったんだ！！先代がばらまいて本当に無いんだ。そのうえ檀石槐とかマジでフザケルな。
むしろ霊帝はお金を貯めて、ちゃんと国庫に補充していたのだ。官職を売買したせいで、賄賂が増えたとかいうが。
後漢王朝はずっと前から賄賂まみれだ！いや、むしろ。

『賄賂で昇進するんだったら、その賄賂が自分の手元に入ってくれ

ばいいじゃない』

と、皇帝が官売をしたことで、賄賂は減ったのだ。
官売をして賄賂が増えるなんて物理的にありえんのだ、相変わらず最悪で最低だけど。

霊帝は凡才だが、凡才は凡才なりに色々と考えていた。
そんな私の気持ちを、一体誰がわかってくれるのだろうか

＞＞プロローグ：将来の夢『長生き』＜＜

思えば霊帝も哀れな男だ。

「１０代で謎のトラックに惹かれて死んだ私とどっちが下なのかなあ」

歩道を歩いていた。
子供のころから母親に『歩道を歩かないと車にひかれるよ』と何度も注意されていたから、車に注意ながら。
そんな私のところに、いきなり猛スピードで道路交通法を無視して歩道を突っ走ってくるトラック。

「危な！！だが、なめるな！！」

私はとっさの判断で、路沿いの田圃に飛び込み。かのトラックを交わす。
ほっと、一息はき、泥まみれの体を見て、全く危ないこともあるんだと愚痴ろうと思った時

「ちょっ、なんで、バックして！！正直ないわー」

なんか恨みでもあんのか、ただの学生に！！
グチャリいう嫌な音と嫌な感覚、二度と味わいたくなく思い出したくないあの感覚。
まあ、そんな感じで私の短い人生は終わりを告げた。

告げたはずなのだが。

「輪廻転生……」

古代中国。
おそらく後漢末期、霊帝の時代。
真名や紙の普及、異様な服装など違うこともある、中国史マニアからしてみれば突込みどころ満載だ。
とは言うものの、私みたいな人間がこの世界へと転生していたと考えるなら説明がつく。
自分みたいな人間がこの世界に転生して文化文明を発達させていると考えるなら、この時代の奇妙さも不思議ではない。
そんな、とある時代と似たこの世界に転生して二度目の人生を送っている。

「なに、たそがれてんっすか、ボロ」

中国の東、日本海側に位置する徐州北部のとある町。
古ぼけた本を片手に野原に腰掛け、ぼんやりと雲の流れる空見つめる。そんなボケーっとしょうもないことを考えていた俺に小柄な男が声をかけた。
彼は仲間内ではチビと呼ばれている。本名は知らない、真名と呼ばれる親しいものに教えると名前も知らない。
盗賊家業を行うでは人の過去や名前については詮索するのはタブー

だ、聞くのは現金。女性の名前ならともかく、男の名前なんか聞きたくもないけど。
ちなみに俺がボロと呼ばれているのは、なんか覇気が無く、貧乏臭く、ボロボロに見えるから。

「あ、あの時のことを思い出しているんだな」

そう言ったのは、肉の塊。デブと言われる盗賊仲間の一人だ。

「ああ、あの女性三人組のことっすか」

「そ、そうだな。あの女性たちに槍を向けられて。
ガタガタ震えながら涙を流しながら、うんこ漏らしたことで」

「あの時は仕方なかったんだ。そうでもしないと首にお縄がかかっていただろ！！
昔々、天下を統一したエライ人がやった、焼き味噌作戦を馬鹿にしないでよ
つうより、一仕事終えてお金があるのにちょっかい出したのはあんたたちでしょ」

「いやいや、悪かったっすよ。ボロ」

「いや、そこまでしなくても」

チビが悪いと頭を下げた。
いや、なんつーか、かわいらしい三人の美少女の前で漏らす。

……なんか、気持ち良くない？って思ったし。

……。

……変態じゃないよね、自分。
股間がキュンとしたけど、変態じゃないよね。
ほら、女性に蔑まれる視線ってエクスタシーを感じないか、感じるだろう。感じるはずだ。

そんなことはないと思った偽善者ども！！
エロゲーやエロマンガで、一度でもそんなシュチエーションはなかったと言えるのか（この時代にはエロゲーはないが）！！俺は何度もあるぞ、何度も！！

それでも、ないっていうやつは哀れな奴だよ、バーロー。
幸福を得る手段が一つ他人より少ないってことだからなあ！！悔しかったら蔑まれた視線でエクスタシーを感じて見せろ！！

……ふう。

「ソレより兄貴はどこにいったんです、泰山近くの墓場荒らしで見つけた書物についての話が」

太平要術の書、社をぶち壊したら見つかった怪しげな本の名前だ。
三国志演技で黄巾党の張角が持っていた書物だったっけ？古い字で書かれているので、詳しく解読ができなかったが内容がやばいことだけは確実。
嫌な予感がするので燃やすように言っておかなければ。

「た、旅芸人のところだな」

まったく、好きだな～。また出費がでかくなるよ。
この盗賊団の財政を担当している身としては、リーダーの旅芸人好きは諌めないといけないかも。

「それより、また本をよんでいるんだな」

「孫子や儒教の教えを覚えなければ、群雄の人材が少ない時に拾ってもらって下級文官として過ごすことができません。
漢文の読み書きをマスターした程度じゃあ、就職には程遠いですね」

「また、天下は分断されると言っているんスカ、
漢王朝の治世は悪いのはわかるっすけど」

「いや、手遅れでしょう」

手遅れだ、どいつもこいつもクズばかり。
皇帝や宦官が悪いというが、全部嘘。清流とか真っ当な豪族と言われる奴にひどい目にあった元奴隷の立場から言わせてもらうとね。

そもそも、清流派と言われる豪族が持っている荘園や奴隷をすべて開放し、ちゃんと税を納めるようにすれば国家財政は確実に好転するのだ。

他人を濁流と見下して聖人面する『そんなこと』もできない人間が、『宦官を殺して我々に政治を任せれば事態は好転しますよ〜』なんて片腹が痛い。

「つっても」

菅子曰く『衣食足りて、礼節知る』だったっけ？
現代でしっかり情操教育を受けた私も、元の世界の『人は殺してはいけないですよー』な倫理観などすでに剥ぎ取られ盗賊活動。
他人をバカにできるような人間から堕ちていっているのさ、『何が国だよクンニしろよ！』的な？

そーんな、私のように状況に流されるクズが下にも腐るほどいるしね。

「しょうもないなあ、自分自身すら」

ただし、しょうもない人生を送っていても黄巾党だけには入らないようにしないと。
元の世界で、官軍たちにフルボッコにされる組織に入るのはリスクが大きすぎる、巻き込まれて死ぬなんてゴメンだ。
死ぬっていうのは死ぬほど苦しい、できるなら二度と味わいたくない。生きている以上、もう一度死ぬことだけは確実なんだけどさ、長生きはしたいやん。

みんなに内緒でコツコツと貯めてきたお金もあるし、黄巾の乱に巻

き込まれないように身を隠すことができるはず。

北の泰山には兄弟な勢力を持つ大盗賊の臧覇、盗品を高値で買ってくれる商人の魯粛など元の世界でも活躍した奴らとも知り合いになったし、

アイツらのところで匿ってもらうのもありかな？

そういや、何故か元の世界とは違い、女性だったな、二人共。

しかも、すっげー美少女。うん、美しい少女だよ、美少女だったけどお近づきにはなりたくない性格。

うう～ん、惜しかった。

って、オレみたいな人間とは釣り合うわけがないんだが、ん？

ちょっとまてよ？

元いた年齢と今生きてきた年齢。

……プラスすると３０歳超える！

２度目の人生の年齢はよくわからんが、女性経験は一度もないのは確か。

童貞。

すなわち、３０歳童貞＝魔法使い。

うわあああああああああああああ！！いやあああああああ

あああああ！！！

そういや、母親以外の女性と手をつないだこともないお。

うわあああああああああああああああ！！いやあああ！！

そんな事を考えていると、我が盗賊団（４人しかいないが）のリーダーが駆け足でやってきた。

「あ、兄貴が帰ってきたんだな」

「なんか息が荒いっすよ」

「ううう、どうて…、どうしたのでしょうかね」

「き、決めたぞ！！！

天和地和人和の役満シスターズの親衛隊を作る！！

あと、太平要術の書だったか？お近づきの印としてくれておいたぜ！！！」

第一話：うわあああああああ！！

北郷一刀がボロ……こと白仲　黒覇と知り合ったのは貧民街のことでだ。

聖フランチェスカ学園に所属するごく普通の少年であった彼は、ある日突然、古代中国に飛ばされた。
何が何だか分からず草原で茫然と立つ一刀。

運よく善意に満ちた人間に拾ってもらえることもなく、食べるももなく空腹に倒れていたところを小悪党に見つかり、
身ぐるみをはぎ取られ、奴隷として二束三文で売り出されることになった。

だが、もともと一刀はバイタリティと人間関係構築スキルの高い。
同じように売られようとする人々を仲間にし、隙を見て小悪党たちに反乱を起こして逃げ出すことに成功する。
その時、事故に近い形ではあるが人を殺してしまったのは、この乱世を生き抜くにおいて良い経験だったと言えるかもしれない。

ひとまずは自由とこの世界で生きるための覚悟を身に付けた一刀。

だからと言って職もなく、家族もなく、異世界から来たと言っても信じる人もない。
未来知識もまったく意味をなさなかった、こういうことなら学校でもっと漢文の勉強をしておくべきだったと後悔した。
いつの間にか過去のことを語ることもなくなり、貧民街でゴミあさりをしながらその日暮らしの生活を行うようになっていった。

ボロボロな衣服を身にまとい、何時ものようにゴミをあさっていると一人の少年が話しかけてきた。

第一印象は、貧弱。
まだ若いのに、リストラ寸前の成績の上がらないサラリーマンのような覇気のない姿。
自分より、2、3歳ほど年下のようだが、まるで駄目なおっさんにしか見えない情けなさ、何があったかわからんが自殺寸前のようなダメさ。
一刀自身、まともな生活を送っているとは思えないがこいつよりはマシだと思った。

「なんだ？この人は」

ひとまず、服の中の賊から奪い取った短刀の重さに意識を向けつつ、彼の話を聞くことにした。

『ボクと契約して、黄巾党になってよ』

……、やっぱり嫌な予感は当たっていたよな。

土下座や泣き落としによって、いつの間にか黄巾党、徐州支部に入ることになった、一刀。
そこで初めて、張角たちが天和、地和、人和という美少女であり、役満シスターズという歌って踊るアイドルであることを知る。
もともと楽天的に物事を考える一刀は『さすがに戦争が起きることはないよなあ、大丈夫かもしれない』と、黄巾党の中でまじめに仕事に取り組んだ。

一方、白仲は黄巾党に入ることを渋った一刀を気に入った。
やっと、まともな判断ができる人間と出会ったと、知り合いが全員アイドルオタクというのは、精神的孤立が激しいのだ。

徐州支部？４の白仲の目にかけられたことや、もともと人付き合いの上手いこともあり、まだ小規模であった徐州黄巾党の幹部になる。
だが、この種馬がまっとうな人生を送るわけがない。ファンも増えだし、悪質なファンも多くなってきた頃のことだ。
ライブの前に質の悪いファンに絡まれていた張三姉妹を助け。

「一刀をマネージャーにしまーす」

「感謝しなさいよね」

「マネージャーがちょうど欲しかったことですし」

と、フラグを３つも立てて黄巾党本体のいる冀州に向かうことになった。
その時、何かをあきらめたかのように白仲が一刀を見ていたのを誰も気づくことはなかった。

「一刀！！大丈夫？」

刃物で切り裂かれた肩から赤い血を流す、一刀。その苦痛に満ちた様子を見て、地和が声をかける。
いつも自分に悪態をつく彼女の泣き顔を見て、思わず苦笑した。

「あはは、これくらい大丈夫。
傷は浅い。すぐに血は止まるって」

痛みをまぎらわるかのように、馬車の馬に鞭を当てる。

「すみません、強硬手段に出るなんて」

いつも冷静な人和が顔をまっさおにし、平静を失っている。

「うん、みんな嫌な目で私たちを見つめていた」

太陽のように明るい笑顔を絶やさない天和が暗い顔をして視線を下に向けた。

黄巾党は大きくなりすぎた。
役満シスターズはまぎれもなく光だった。くらい漢王朝を照らす希望。
そんな希望に荒湯津者たちが集まっていった。
漢王朝に不満を持つもの、人生のすべてが嫌になったもの、大事な人を殺されたもの、そんな負の感情を持った人間たちが闇の中の光に群がるガのように集まった。
だから、黄巾党は大きくなった。そして、大きくなりすぎた。
怨念にまみれた超巨大な爆薬、ソレが現状の黄巾党だ。

そして、そのきな臭さを嗅ぎつけ、役満シスターズの影響力を利用しようとする者たち現れ始めた。

『今の黄巾党は危険過ぎだ、この状況！！！早く何とかしないと』
一刀は独自に信頼できる仲間を集め始めた。状況を打開するために。
だが、遅すぎた。その動きを彼女たちを傀儡として扱おうとする者たちに気づかれてしまう。
彼らは三姉妹を無理にでも拘束して手中に収めようとする強硬手段にでた。間一髪、一刀は仲間と共に剣を片手にその包囲を突破する。
その代償は大きく肩を件で大きくえぐられ、仲間たちも何人も失ってしまった。
だが、悔やんでいる時間なんて無い。無理矢理にでも逃げ出すことに成功したんだ、後は何処に行くかだ。
「そんなもの、一つしか無いな。みんな、徐州に行こう」

「…徐州？」

「ああ。アニキもチビもデクも、そして黒覇さんも力を貸してくれる。大丈夫だ」

元盗賊で武闘派のアニキ達は重度のシスターズファンだし、
黒覇さんは前世とか興味あるって変なことよく聞く人だけど、頭がいい人だからきっと。きっと大丈夫

一刀よ、成仏しろよ。
おそらくこれから死ぬであろう友人のことを頭に浮かべた。

「何を考えているんだい？
まあ、キミのことだから、小さい小さい事なんだろうがね」

小柄な体を黒いマントに身を包み、背には腰まで届く三つ編みを垂らしていた。
白い肌をした儚い印象を与える間違いなく美少女…、なのだがやけに服装からして怪しく不気味であり、不敵な顔つきをしている彼女は胡散臭く感じる。

「相変わらず気持ち悪い言い方をするなあ、魯粛」

黄巾党、徐州支部の一室で、白仲はため息を吐いた。
徐州支部は黄巾党の端っこに位置するが、交通の便がよく南方の役満シスターズファンの集まる場所である。
白仲は孤児や流民などに声をかけ、ステージの清掃や役満シスターズグッズの作成、ライブ装置の作成など。
ファンたちの過ごしやすい環境を作り地道に集客力を上げ、黄巾党の中でも力を持つグループの一つとして成り立たせた。。

「女性に対して気持ち悪いとは何事だね、
それにくわえ、女性を前に他の人のこと考えるのは失礼なのでは」

「はいはい、悪うございました」

白仲の前にいる人間は魯粛子敬、盗賊時代からのお抱え商人の一人だ。
豪商に生まれたのに、怪しげな賊と商売をする。まともな神経じゃないやつ。周りからは狂児と言われ変態扱いされている。

「では、本題に入ろう。
念を押すようだけど、黄巾党が乱を起こすのは今年中だというのは確実？」

「まね。黄巾党本隊のある冀州が豊作になるそうだから確実でしょ。
農民の一揆なら不作の時に戦う、ごはんを食べるため、生きるためだ。
…が、コレは一揆じゃない。黄巾党という軸を主体とした、『戦争』だ。
『戦争』なら最低でも食料と武器を準備して確実に勝つために動く、すなわち自分が有利に動ける『今年』」

「ふむ、理にかなっているね。
約束の食料は準備しておくよ、まあ武器の輸送は難しいが」

「武器の方は臧覇に当たっている、問題はない」

新品ではないが、武器はもらえる約束であった。
すでに、アニキたちを『強くなきゃ親衛隊はダメでしょ』とのせて、訓練を積ませた部隊は十分に揃っている。
本当にバカで行動力のある人って扱いやすいな。

「ふふっ、ずいぶんとやる気だね。
漢王朝に喧嘩でも売るつもりかい」

「何だよ、人を過大評価しないでくれ。
自分が助かるために最善手を尽くしているだけだ、黄巾党や漢王朝がどうなろうと知ったことじゃないな」

「ふむ、つまらない」

白仲は思った。戦争のため、生きる準備はして置かなければならない。
たとえ黄巾本隊が滅びるとしても、自分たちは生き残り、軍事力を得ようとする何処ぞやの群雄に降伏するため。

そして。

一刀悪い！！！マジで成仏してくれ、巻き込まれて死ぬことになるけど、恨まないで。ゴメンよ。
本当にごめんなさい！！！蓬莱（日本）出身ってことで同郷で仲良くなれそうだったから上層幹部に推挙して悪い、うわあああああ。
でも、アイドルになんて興味無いので、役満シスターズと心中なんてゴメンなんだよ！！

一人で死んでおくれ。
ほら美人アイドルグループのマネージャーになってパイタッチしたんだろ！！
そこまでいい思いしたら、きっと満足して死ねるはずだ。
うん、満足。
満足さ！！！
オレは嫌だがな！！！

「こ、黒覇さん」

そんな、ことを考えている白仲の耳に聞き覚えのある声が聞こえた。
あれ？幻聴？はい幻聴ですよねー。徐州でのライブ予定はなかった筈ですよー。なんで、聞こえるだろう。

「助けてください」

オウ、ナゼー、一刀サンの声がキコエルンデスー？
ワターシ、日本語わかりません。ここ中国です。ウソダドンドコドーン！！

「…はっ、罪悪感か、罪悪感が幻聴を
罪の意識！輪廻の果てに悔いを」

「おいおい、現実を見給え」

魯粛が霊視なツッコミを入れる、目の前には方に包帯を巻きつけた一刀。
そして、その後ろには憔悴した巨乳の天和、貧乳の地和、普通の人和のアイドル三姉妹。えっと、ＷＡＹ？

「な、何じゃそりゃあああああああああああ！！」

「……プッ、クスクスクス（笑）頑張れよ」

魯粛が指をさして爆笑していた。

「天和ちゃんたちのために戦うしか無い」

「おお、アニキが燃えている！！カッコいいっす」

「頑張るんだな！」

うわ、頭痛い。とノリノリで戦に参加しようとする義兄弟に頭を抱え

「それで戦争が起ころうとしているってわけだ！！」

「はい、間違いなくこのままでは黄巾党は暴走します、朝廷との戦

いが始まります」

うん、わかっていたさ。と頭を捻り。

「おいしいな、この肉まん。おかわり頼むぞ、黒覇」

「わたしもーっ」

「いや、なんで魯粛、おまえがここにいる」

白仲は魯粛にツッコミを入れた。まあ、オレをあざ笑うためだろう。しかし、どうする。どうすれば、どうしてこんなことに……。三姉妹と徐州市部の幹部、そして一刀の会議を尻目にひとり悩みぬく白仲を興味深そうに魯粛は眺めていた。

ああ、どうすれば。

歴史では朝廷は黄巾党を滅ぼす。

更に、現状で戦力といえるのは徐州支部だけなら論ずるまでもムダ。…勝てない、勝てないな。

かと言って、死にたくない。いちど死んだ身だからこそ言える、あれは嫌だ。絶対に嫌だ。

肉や内臓が潰れミンチになる感覚はもちろんのこと、そこから先にある、自分が溶け出し消えていく精神の消失。あの恐怖は今でも夢に見る。

「黒覇さん、朝廷との戦いをどうすればいいと思う」

一人、会議中に何一つ声を出さずに黙りこむ、白仲へ一刀が声をか

ける。
会議が一向に進まず焦燥する一刀の顔を見て思った。なんで売女のためにオレが命をかけなければならないんだ！！
こいつら全員、黄巾党たちは全て滅んでしまえばいい。そう、自分以外の者は死んでしまえば。

死んでしまえば？

そうか、そうだ。

「先に言う、朝廷とやりあって勝てるわけがない」

「なっ、ボロ。テメエ」

白仲の叫び声に、一瞬、何を言っているんだコイツと蔑んだ視線が集まる。魯粛を覗いては、だが。

「だが、手は『ある』」

不遜な言葉に、古い付き合いであるアニキたちは『久しぶりか』と心中でため息を吐いた。、

「すまないが、朝廷に三姉妹のファンはいますか」

「宦官の十常時に一人いるっていう情報が入っている」

十常時といえば皇帝直属に近い存在、これなら。

「魯粛、時間を稼がせることは可能か」

魯粛はクスクスと笑い。

「さて、時間を稼いで一体何をするのか？

うん、『西方の五湖などの異民族が不穏な動きをしている』とでも話させれば時間は稼げるよ、

乱が本格的に起これば異民族はかならず来る『この言葉』は嘘にはならない。むしろ功績として認められるんじゃないかな？」

「ああ、わかった。仲間に頼んで使者を送ってもらう」

一刀がすばやく誰を繋ぎにするか頭に浮かべる。

脱出経路の１つを確保するため、中央の人間連絡をとりあっていた。

それを元にして考えれば、人選は絞れるはずだ。

「そして、アニキ！早ければ早いほうがいい、兵を動かせますか」

「ああ、もちろんだ。って、官軍と戦うのか」

血が騒ぐといった様子でアニキが席を立つ。

もともと盗賊。官軍との戦いは一度や二度ではない。やってやるぜと不敵な笑みを掲げる。

しかし、白仲は冷たい言葉を口から放った

「いや、狙いは『黄巾党』です」

その発言に会議中の人間が息を呑む。

「朝廷と戦っても勝てませんからね、
義勇兵という立場で勝てる黄巾党と戦います！」

「ちょっ、ちょっと待ってよ、ちー達は黄巾党のリーダーで」

地和は困惑しながら口を開く。

「黄巾党の暴走はひどくなるでしょう。農民たちを巻き込み、実態がわからないほどのものに。
だから先んじて黄巾党を攻撃して十分な戦果を与える必要があります。
たとえ、真実の情報が流れても『ああ、情報が錯綜していたんだ！役満シスターズが漢王朝の敵だなんてありえない』と、こんな感じになるようにね」

嘘でも信じ続ければ、真実に見える。
成功するかは実績次第だけど、ソレについては問題はないだろう、なぜなら。

「クスクス、えげつないなあ。

鋤や鍬が武器の農民達相手でも、十分に兵器で武装し訓練をした自分たちに勝てるはずもない
そして、同じ黄巾党のメンバーなら一部例外を除き、三姉妹相手には剣は向けれられない、だから、負けるはずがないか。
うん、官軍と戦うのの百倍はマシだ！！」

ましてや、自分たち徐州黄巾党の士気は崇拝する三姉妹の手によって限界突破。
戦う前から勝負は決まっているだろう。

「ひとつ聞きたいんだけど、戦うためのいいルートはないか」

「泰山をぐるっと回って青州方面に突入かな、いざとなれば黄河を盾にすればいいよ。
本隊のある冀州は激戦区になるだろうから近づきたくはないね」

「そうか」

そう言って、白仲は少し目をつぶると三姉妹に声をかけた。

「この経路にある黄巾党のライブ拠点は幾つありますか」

「えっと、小規模なものが４つ、大規模なものが１つあります。食料などの保管は少ないと思われます」

三姉妹の中で参謀に当たる人和が恐る恐る答える。

「なら、敵は黄河にでも叩きこんで殺せるだけ殺しましょう。
降伏は認めても構いませんが、味方の数はなるべく増やさないように」

徐州支部の兵はざっと８００人、一刀が連れてきた三姉妹直属の精鋭が１００人。
民衆から略奪をしないで戦うと考えるなら、必要となる食料は大量になる。さらに、まともな兵站確保の経験があるものは徐州支部にはいない。

「待ってよ。なんでファンのみんなと戦わないといけないの」

「そうよ！どうして私達が」

アイドルたちがファンと戦うという現実に、耐えられずに声を上げる。
伯仲は『うぜえええええええええええええ』と心のなかで叫び、頭に青筋をビキビキと浮かばせていた。
くそったれ、夜にオカズにするから覚えてやがれ！！

「愛するアイドルに迷惑をかけることが分かりながら、戦おうとする奴はファンとは言えるはずがねえ！安心してくだせえ、手を汚すのわ俺らですから！」

「「「アニキ、カッコエエ」」」

そんな中、突っ込みを入れるアニキ。なんて行動力あふれた言葉なんだ。
よし、もっと言え、ビッチどもにもっと言え、

「それでも、元はといえば一刀が徐州なんかに来いって言うから」

「ちょっと、ちー姉さん落ち着いて」

一刀を非難しているけど、人のせいにするんじゃねえ。白仲は切れかけるが抑える
いや、太平要術の書の件を考えれば責任は彼にもあるんだが。
「それに、女っ気のないあんた。あんたも結局私たちを利用して…」

女っ気のない？

女性経験のない？

右手が恋人？

……。

「うるせえええええ、クソビッチ共が！

童貞で悪いか！童貞だよこんちくしょう！人のせいばっかしやがってよ！！

ファンが死なずとも貴様らが死ねば解決すんじゃボケがあああああああああああああああああ、さっさと死にやがれボケェえええええええ」

あ、人生オワタ。

へーイ！！みんな、白仲だお。
只今、ボクはかごの中に簀巻きにされているんだぜ。
最初は皮膚に食い込む縄はただ痛いだけだったけど、気持ちよくなってきたんだ！
慣れって怖いね、人間の生体の神秘を見たよ。みんなも数日間簀巻きにされてみよう、きっと新たな世界に目覚めるはずだ、ウフフフ。

「気持ち悪い笑みを浮かべないでもらいたいな。
一刀が『もし殺すなら自分も死ぬ』と庇いだてをしなかったら、、首と胴が離れていた身とはいえども心を壊すには早いぞ」

「うむ、そだねー魯粛。しかし、何でソレで助かるのか」

「彼女たちが一刀に惚れているからに決まっているだろう」

畜生、何故だ！
不公平だぜバッキャロー！！あいつとオレの何処が違うんだ。
白仲が心のなかで涙を流す。

無論、他人を簡単に見捨てるコイツと人のために命をかけられる一

刀どっちがモテるかは言うまでもない。
ただの人間としての器の違いである。

「それに彼は人の心の中に入ってくる所があるからね、
か弱い私は心を覗き込まれるのは死んでもゴメンだけど、気に入る連中は多いだろう」

「か弱い（笑）」

「……ほう、そうか、うん」

白仲が失礼にも魯粛にを差す。

「兵士の他の事務用の徐州黄巾党たちは行く場所はなくなる。
私の所で養ってやろうと思っていたのだ。君のおかげで色々と稼がせてもらったのでね、商いの規模が拡大して人材が足らなくなったのでちょうどいい。
その対価といってはなんだが。君にちょっとしたお礼でも与えようとしていたが、辞めることにするよ」

「ちょっ、マジ、謝るから金くれ」

第二話：内政の仕方がわからん（キリッ）

黄巾の乱は終った。

もともと、指導者らしい指導者がいなかったのだろう。
味方同士で争いを繰り返し、足並みが揃わず各個撃破されていった。

この戦いで最も活躍したのは袁紹である。
まとまりのない黄巾は敵将狙いや指揮系統破壊などの戦術はできない、数の多さにモノを言わせてすり潰していくのが最善策。
最も、その作戦を行える群雄など現時点では袁紹と袁術しかいかなかった。
しかし、袁術は孫家に対して少ない兵力を与え、自身は傍観したため、華麗に美しく大軍団を率いる袁紹には大きく差を開けられる。

少数の兵ながら活躍した者たちがいた。
特に民間からの義勇兵からは2つの勢力が軍を上回る成果を上げた。
1つは張三姉妹の率いる軍と。

「反董卓連合かー」

「はい、桃香様。袁紹どのから各地へ檄文が放たれています」

劉備軍である。その功績から青州・平原の太守とされ、その地を治めている。
漢王朝の血を引く彼女は乱れ人が傷つくことを憂い。戦を嫌いながらも、人々の笑顔のためと義勇兵を率いた。何処かの義勇兵とは全く違う。

その純粋さに惹かれる者は多く、彼らと共にその地に善政を敷いていた。

檄文をじっと見つめた劉備は、その柔らかで美しい顔を怒りと悲しみに染め上げていた。

「うん、こんな狼藉を許せるはずがないよ。参加しよう、愛紗ちゃん」

「しかし、并州の太守、董卓か。活躍を耳に聞いたことはないぞ」

関羽が不思議そうに頭をひねる。

「董卓さんは黄巾党との戦いには参加しませんでしたが、活発な五湖の牽制のため涼州へ向かったようです」

孔明は現在入ってきた情報をまとめていった。

まとめた、と言っても、自分たちに入ってくる情報は少ない。わかっているのは、涼州出身のために故郷へ向かい馬家と共に五湖を追い払ったことくらいだ。

本来、間者を使い、情報を収集すべきなのだが、太守になったとはいえ、自分たちの組織は新興勢力。

彼らを雇う余裕もなく、育てる時間もたりない。

今はまるで、闇の中、彼女たちの頭脳を使いこなせる状況ではなかった。

そんな中、突如。別の仕事をしていた？統が部屋に駆け込んできた。

「あわわ、も、申し上げましゅ。張軍から安値で兵糧を売り渡したいと」

「にゃはは、ボロボロの人が『コレを買ってくれないと、借金で自滅するんです』って泣きながら土下座をしていたのだ」

慌ててかけこむ鳳統の後についてきた張飛が笑いながら口を開く。

「ほう、ソレは良かったではないか。
コレより魏のための戦に向かうのだ、腹が減っては戦ができぬ。幸先の良いことでないか」

「うん、そうだね」

「やったのだ」

三人とは異なり、駆け込んできた?統は顔を真っ青にしてふるえる。

孔明には、彼女が何故震えていたかが分かった。

張三姉妹は得体がしれない。
無論、義勇軍として活躍をしたから恐れているわけではない。
北郷一刀と呼ばれる将が１０倍近い兵を幾度も破っていったが、所詮烏合の衆が相手だ。運と軍事才能があればその活躍も十分にありえる話だ。

むしろ、自分たちと同じく青州の一郡の太守になってしてからの行動が奇妙すぎる。
領地について早々の軍縮、さらには税の一年間の免除、その状態で平原を除く他の郡への影響を伸ばすための巡回行動。
また、警察と呼ばれる市内の治安改善策を始めとした漢の法を無視する数々の政策。

不気味、何を考えているか不可解な行動。その状況で『何故か』、漢という国が文句ひとつ言わない。

そして、まるで狙ったかのような食料の売りだし。

怖い。

……一瞬、よぎった、恐怖心を忘れるかのように董卓との戦いのことを孔明は頭に浮かべた。

ヘーイ！！みんな、白仲だお。
ちなみに、黄巾党との戦い。ずっと縄に縛られていて何もやっていないぜ。
それにしても一刀はすごいね、『戦いのことを教えて欲しい』って言ったから、孫子や六韜を読み聞かせてやったら、すごい活躍。

アイツ天才じゃね。
最初の方は策が失敗することも何度かあったけど、戦略的に優位だから力押しで何とかなったっていうのもあるね。
すぐに失敗点を修正して、無理矢理にでも戦術の腕を磨いていけたんだ。
地味にスパルタ教育よりもスパルタじゃないかな～、失敗すると人たくさん死ぬし、根が善人な一刀はきつかったと思うぜ。
戦いの後半は無双に近かったけどさ。

それにしても、イケメンで天才なんて死ぬべきだよ、全く。

「なにボーとしているんだよ、白仲さん」

いつものように電波を拾っていた白仲に一刀が声をかける。
青州、済南郡。黄河を挟んで平原郡と向かいあう位置にある青州の交易の拠点として名高い町だ。
そんな、済南郡太守の城の一室、白仲に与えられた仕事部屋。

無造作に大量の書巻が机の上だけではなく、地面にまで散らばっている。衛生面で優れたとは言いがたい場所。

「やあ、天才児」

「誰が天才児だ。ソレより食料は」

「なんか、劉備のところは妙に渋っていたけど。鼻水出しながら『コレを買ってもらわないと、北郷様に何と言われるか』嘘泣きしたら余裕で売れました。
コレで今年の給与をみんなに払えるよ」

「ちょっ、おま。何言ってんの」

白仲は今までの苦労がついに報われたと喜んだ。
それにしても、知り合いを犠牲にすることを躊躇しないあたり、ゴミみたいな男である。

思えば、基本的に脳筋ばっかり、所詮義勇兵です。内政官たちは戦乱を避け、南方や袁紹や曹操のところに流れていて。
「ぶっちゃけ、俺等は政治なんて出来なくない？」そのことに気づくのは、大して時間がかからなかった。
そこで、周囲の反対を押し切り今年の税収を免除。税のとり方が全く分からないのに、この状態で税を取ると反乱の危険のリスクが高すぎる。
只今、文字を読める奴は必死こいて勉強中です。

と言っても、お金なく兵たちを養えるわけがなく、元農家は帰農させた。
一応、三姉妹の巡業を劉備の住む平原を除く、青洲中で行なった。

あまり、派手にやると黄巾の乱の二の舞になるから自粛はしてある。
ライブの規模が小さい分、入ってくるお金が少なくなったのは言うまでもない。

そこで、

「すみません、お金を貸してください魯粛様」

「帰すあては」

借金です。ただ今、私は借金地獄ですよ。

と、言っても帰す当てはあった。霊帝の具合が悪いというのは十常侍からの連絡でわかっている。
オレの知る歴史とタイムスケジュールが微妙に違うが、霊帝が死ぬ以上、董卓の権力保有がなかったとしても中央で何らかの政治混乱が起きるはず。

最悪戦争、ソレも大規模な。

霊帝の病状をリアルタイムで知ることができる自分たちなら、戦争が起きる前に借金で買いためていた食料や武具を売れる。
物価上昇の割合を考えるとかなりの儲けになるはず。
魯粛にそのことを伝えると

「ふむ、ならば、私も稼がしてもらおうか」

と、快くお金を貸してくれた。ちなみに担保はオレ自身、ミスったら奴隷生活まっしぐらです。
予定通り反董卓連合はできたからいいけどね。

「いういや、白仲さん。反董卓連合に参加しないのか？」

「一刀、俺達に参加できる財力と兵力があるとでも」

「だよな。食料を安値で売ったことで、参加を見逃してもらうしか無いな。

黄巾の乱で民の疲労が大きく、戦に迎える状況ではないとか、書状に書いとこうかな」

ひとまず、反董卓連合地には動かず。

一年ほど待って、税金を手に入れて魯粛の借金を返して、その後に何処かの群雄に降伏する。コレが基本方針だ。

「そういえば税収に関してですが

こんな無茶苦茶単純にして良いでしょうか、税制度や他の制度も」

「一応、漢の法体系を削って作っているから、革新的な面はないよ。文官の仕事の引継ぎは十分に可能だ。君の考えた警察制度は入れておいたけどあと、十常侍が味方だから政府から文句を言われることはない。いいね、腐敗した政治って」

「よくないだろ、普通」

少し困った顔をして、一刀はやれやれと肩をすくめる。

黄巾の乱での十常侍の判断（と言うより、魯粛の入れ知恵）は、的を得ており異民族の反乱を先んじて撃破して国土の安定をたもった。

さらに、彼らの推挙した張三姉妹の活躍は眼を見張るものであり、

皇帝の信任と政治家としての実績を積んだのは当然とも言える。
現状、十常侍にとって自分たちは懐刀のような存在であり、裏では色々と優遇されている。
「それにさあ、そもそも文官少ない状況で、こんな複雑な政治が出来るか。
できないよなあ、仮に一刀お前ができたとしても、だ。オレができない。オレにはそんな才能無い！！！
働きたくないでござる、絶対に働きたくないでござる！！」
そう言って泣き言を言う白仲、一刀はその姿を見てため息を吐く。
「結局、虎牢関のまもりを突破することが出来なかったようね」
「も、申し訳ありません。華琳様。私の力が至らぬばかりに」

「いえ、謝ることはないわ、春蘭。
私たちに利する戦いでは無かったし、天下に曹操軍の勇猛さを記すという最初の目標は達成できた、
加えて、優秀な将を捕縛することができた。これだけあれば結果としては十分すぎるほどよ。
それに、勝てずに麗羽が顔を真赤にして怒り狂う姿も見れた」

反董卓連合、曹操軍の陣地。
兵たちが間者を警戒し、見張っている、鼠一匹入ることもかなわぬ。
夏侯惇の謝罪を曹操はさも当然の結果であると平然と返し、くすりと意地悪く笑った。
麗羽が袁術にバカにされているところを思い出すと、今でも吹き出してしまいそうになる

曹操は天才だ。
一部の例外を除き、自他ともにそのことを認める人間。欠陥と言うならば、体躯が小柄なことだけであろう。
彼女が現状を見てどう思うか、もし、この腐敗した世界をどうすれば改善できるか考えるか。

『漢王朝はすでに寿命、新たなる英雄が新しい王朝を開くのが最善』
それが彼女の出した答え、そして、才と言う基準で考えるならに見合う人間は自分だ。
いつしか彼女はこの時代に自分のような天才が生まれたことを、天命であると考えるようになった。
覇者は自分にこそふさわしい、天命に選ばれているのだから。

「とは言え、虎牢関を落とすことが出来なかったは失態という以外

にありません。おそらく、あの張三姉妹の影響が大きいと思われます。
　群雄たちはかの勢力を恐れ、兵たちを十分に出すことは出来なかった、ソレさえ無ければ違う結果になったでしょう」

夏侯淵が表情を変えることなく意見を言った。
しかし、武人である彼女にとって今の状況は決して嬉しいことではない、
桂花を始めとした将や軍師を残して戦い、全力を出せずに敗北するのは恥ずべきだ。

「フフ、悔しいのはわかるけど二人共、次の機会があるわ。そう、足手まといが居ない全力で戦う機会が。
　その時こそ天下に我軍の力を存分に見せよう。董卓軍に。

そして、あの忌々しい張三姉妹相手に」

「「はっ」」

自らの王たる曹操に夏侯姉妹は頭を垂れる。
忌々しい彼の者らを戦いで打ち倒すことを心に誓って。

その数日後、自らの領地に撤退をした曹操は、すぐさま領地拡大に着手する。
わずか一郡を収めるに足らぬ弱小勢力であった曹操軍は、霊光のような速さで一州を支配しかねない大勢力へと変貌する。

「残飯ウメエ！！！」

ぼりぼりと音を立てながらゴミ箱の残飯を漁る、白仲。
ここ城の食堂のゴミ捨て場、誰が見ても乞食。見事に彼の容姿とマッチしている。

借金苦や財政難と共に、三姉妹に恨まれているせいで給料が低いのだ。
いざとなったら、逃げるためのお金を確保するには食費をはじめとしたあらゆる生活費を削るしかない。

それにしても、今日はあたりの日だった。
三姉妹が食堂でご飯を食べたため、いつもよりも残飯が2ランクほどおいしい。
生きるためにはウ●コや人肉でも食いますが、おいしい料理というのは心をいやし、健康を保つもの。
食道楽におぼれ、大金を失う貴族たちがいるのもわかる。

作られて時間のたっていない新鮮な焼き魚の食べられなかった頭をぼりぼりと齧る。

「……何やっているの、白仲さん」

「ん、一刀じゃないか。お前も飯か」
お膳を持った一刀が冷たい目線で、残飯漁る白仲を見つめている。
「ええ、天和たちの食べきれなかった食事の残りだけど。
食堂のおばちゃんに乞食が残飯を漁っているか確認して欲しいって」
「おいおい、金がなかったおまえも乞食だっただろう、気にすることはないさ」
一刀は少し考えこむと納得した面持ちで頷き、『そうだな』と口を開き、白仲の隣でご飯を食べ始めた。
白仲に『自分のごはんを食べるか？』なんてことは言わない。いう必要もない。
奇妙に思えるかもしれないが、それが自分たちの間の信頼であるし、乞食として生きてきた間に培った自分自身のプライドでもある。
「ふふふ、まんぷくってね。
そういや、一刀はどうするんだ。何処かの群雄に投降した後」
「そういえば、警戒しないですか。自分たちの組織」
「まさか、所詮は乞食や盗賊とアイドルの塊、気にする奴らなんているのか？
警戒するなんて想像力がちょっとお粗末としか言えないよ」
「そうだよな、三姉妹のアイドルグループのマネージャーの続きかな。

きっと群雄たちは彼女達を利用するから、政争に巻き込まれて死なないようにしないと。次こそは間違いを起こさないように」

持った湯のみを力強く握る一刀、その手はすでに数多の戦で剣を振るったせいで傷だらけだった。

すでに、この世界に降り立った時と指一本すら違いが顕著に現れている。

「守る、ねえ。赤の他人を守るなんて理解できんわ」

「いや、か弱い女の子を守ろうとするのは普通だぞ」

恥ずかしそうに苦笑いをする一刀。

この世界に降り立ってから、一刀の中では決して変わらないものもあった。

「って、アレか。お前らエッチな関係とか。

……って言って虚しくなってきたな。だいたい今の政治体型で三姉妹と交際する危険性はおまえも知っていることだし。

アニキやファン達に知られるとミンチになりかねないことをやるわけ無いよな」

「……」

「え、なにそれ、怖い。

何でＫＯＮＯチンコ黙るの」

コイツ、まさか。本当に三姉妹のうちの誰かと（放送禁止です）なことを。

もしそんなことがファンたちに知れたら、ナイスなボートで先決の

結末に直行してしまうぞ

「は、は、白仲さん。あなたこそ、ど、どう、どうするつも」

「もういい、もういいんだ、一刀。この質問はなかったことにするよ
ああっと、如何するかだっけ、三姉妹に恨まれているオレが同じ陣
営に入れそうもないしなあ。
魯粛の家にでも行って仕事をもらうよ、流血の展開は怖いし」

「オレ、やっていけるかな」

「オレは魯粛に助けてもらう」

「う、ずるいぞ」

?水関を速攻で落とした袁術軍、最も主力は孫策の率いる軍であっ
たが。
戦いの成果は虎牢関の戦いにおいて張遼を捕縛した曹操軍をはるか
に上回るものであった。
そんな袁術軍に対して、袁紹が虎牢関を落とすことができないのを

見て、袁術はひたすらに満足であった。
袁術の上機嫌は孫策軍に利益をもたらした。
暗い部屋で二人の人間が密談をしていた、お酒を機嫌よくすすっている一人は孫策。もう一人のメガネをかけた知的な印象な女性は親友の周瑜。
二人共褐色の肌をした、長身でスタイルのいい美人である。

「ずいぶんと上機嫌みたいね。
孫家に対する監視をよわめてくれるようよ」

孫策が機嫌良く空になった器にお酒を注ぐ。
孫堅が指揮する一大軍閥であったが、彼女自身が戦いで流矢を受けて死んでしまう。
長女である孫策が家督を相続するはずだったが、権力を持つ袁家が干渉、彼女の若さを理由に孫家の軍兵を奪ってしまう。
孫策の妹たちは人質として扱われ、袁術軍の走狗として扱われる日々。

だが、彼女たちは飼いならせる狗ではない、喉笛を噛み千切る獰猛な虎だ。

虎視眈々と独立の機会を探っていた。

「あまり油断するのは良くないわ、雪蓮。
今は反乱成功のため慎重に仲間を増やすべきよ」

「そうね、冥琳。そういえば魯粛って子。仲間に加えられそう」

「彼女曰く『陸遜も君もいる、非才である自分は要らない』って話をしているし」

嘘っぽく微笑む、魯粛の顔を思い出した。

何処からどう見ても、自分が負けるとは思っていない人間の顔だった、

「でも、孫家を裏で援助しているってことは、脈はあるってことよね」

「それ以上に青州の人間に好意的らしいけど」

魯粛が徐州北部にいって何者かと会談しているのは、自軍の斥候の手で分かっている。

人手が足りない現状、彼女を魯粛ばっかり調査させるわけには行かないので、誰が彼女と連絡を取り合っているかは謎だ。

「恋敵参上……かしら」

「そういえば、『愛しの君はヤル気がない』と酒の席でふざけたことを行っていたかしら。

私たちは対抗馬、本命は他にいるってことでしょう」

その言葉を聞き不敵に笑う孫策。

「まあ、いいわ」

「あら、いいの」

「ええ、愛しの君を殺せば済む話でしょう」

「ずいぶんと苛烈な略奪愛ね」

やっちまった

董卓軍は運が良かった。
１つは涼州に向かい五湖と戦ったこと、自軍の戦術や手の内を他の群雄に悟られることがなかった。
また、彼の地の有力者、馬家とも懇意になることができた。地理に的にも涼州は、洛陽や長安のある司隷の後方を抑えている。
反董卓連合が結成されたとき、すぐさま馬家に手紙を送り、味方にすることができた。
２つは張三姉妹の存在である。
彼らの動きを警戒して、群雄たちは多くの兵力を出すことが出来なかった。

「とは言え、張遼が捕縛されたというのは痛いわ」

早朝、洛陽の王宮
その一室、メガネをかけた神経質そうな少女・賈？が疲れた口調で呟いた
劉備３姉妹の活躍で呂布が抑えられている間に、曹操軍が張遼を網にかけ捕縛してしまった。
その知らせに、董卓軍一同は涙を流して悲しんでいたが、しばらくして張遼から

『元気やから気にせんといてなあ、
ぶっちゃけ、ウチ恋ちんたちと本気でやり会いたかったし、ここの空気が気に入ったんで曹操軍に入ることにするわ

ま、恨まんといて、これも戦の定めや』

と書かれた、手紙が届いた。
その内容にブチ切れた賈？が、奇声を発しながら手紙をバラバラに引き裂いたのは記憶に新しい。
今思えば、曹操軍に寝返らざるえない状況だった張遼が、自分たちの心配を紛らわせるために書いたことだったかもしれない。

「あ、月、おはよう」

「うん、おはよう、詠ちゃん」

執務室の中に儚い印象を与える可愛らしい少女が入ってきた。
彼女は董卓、袁紹が自身の権力集中のために嘘八百の悪評を流された少女である。
この姿を見ては、王都洛陽で暴政を働く群雄と言われても誰一人信じないだろう。

「并州の動きはどうなったの」

「ごめん、やっぱり救援が間に合わなかった、冀州の袁紹が并州に攻めこむのを止めることが出来なかった」

反董卓連合崩壊以後の袁紹の軍事行動は早すぎた。
自分たちがもともと支配していた空っぽの并州に攻め込んだ。
動きが早いということは、逆に言えば、補給や兵力補充が完璧ではないということだ。
食料を十分に得られることが出来なかった質の悪い兵たちが、かつて自分たちが治めていた土地で略奪を繰り返しているのは言うまでもない。

「だ、大丈夫よ。
食料と武器を確保できたら必ず、并州は取り返してやるんだから」
心配そうに俯いている董卓に向かい胸を叩いた。
そうだ。今、司隷と涼州を抑えているのに等しい。戦いの準備が終われば袁紹とて撃破はできる。
つぎは、どうやって時間を稼ぐか、だけど。

ヘーイ!!みんな、白仲だお。

今日はオレとアニキ達の出会いについて教えようか……って聞きたくないか野郎との出会いなんて。
えーと、なんで、そんな話をしようかと思ったかというとさ

「死んだ、ね。
そーするとオレがこの軍にいる必要もないわけだ」

白仲は斥候の話を思い出してつぶやいた。
最悪だ、状況は。攻めてこようとする袁紹軍に降伏するための使者にアニキたちが選ばれることになった。
張軍の中では組織の中で上位に位置するし、人選としては間違っていない。なんだかんだ言って、礼儀作法も影でこっそり練習していたし、オレが行くよりはマシだっただろう。

当初の予定では、曹操軍に降伏する予定だったのだが、袁術や劉備と戦っているのでコチラを気にする時間はない。
自分にとって全てがうまくいくわけではないのだ。
そんな中、ボロボロの姿をした一刀が部屋に入ってきて、ぐったりと倒れこむ。

「おや、生きているとは意外だ」

「……どうやら、公孫賛軍が動いたって話だ。
黄河流域はずいぶんと食い荒らされている、クソっ、オレにもっと力があれば」

話は単純だ。
降伏拒否、アニキたちは殺され、領土内に進行される。
反董卓連合、并州の戦いを終えた袁紹軍には兵の疲労や、食料の問題から考えてまだ攻め入らない。時間を稼ぐはずって思ったが見事に外れることになる。
あと、劉備が平原から徐州の州牧に呼ばれたというのが痛い、張軍の本拠地までフリーパスだ。

せめて、あと少し時間があれば。黄河を軸とした防衛戦が行えたが。

「一刀、大丈夫」

一刀に続くように現れた三姉妹が彼の体を気遣う。
寝るまもなく住民を避難させ、死ぬ気で防衛線を構築していた一刀は顔を青くしている。

「まー、大丈夫じゃない。死んでないし」

ツンツンと足先で一刀を突付く白仲に、平手打ちが走る。
殴ったのはいつも破天荒な姉たちの抑え役になるな人和だ、眼鏡の奥ノ瞳に涙を貯めて睨みつけている。

「あ、あなたって人は」

「おいおい、いきなり何すんだよ。マジで痛いっす」

「自分の義兄たちが死んだんですよ、なにか言うことは」

そう言われて、白仲は考えこむと

「そりゃあ、人はいつか死ぬでしょ」

と、何を言っているんだ？コイツと、見下した視線で答えた。
その発言に激昂した人和はもう一発叩こうと手を振り上げる。しかし、その手は

「なんで止めるの、ちー姉さん」

姉である地和によって止められていた。

「なんで？って、あなたは役満シスターズにおいての軍師格よ。どんなに嫌でもコイツとは仲良くなっていかなきゃならないの
……だから、ね」

「へブっ」

「コイツはアタシがぶん殴る！！！」

白仲の顔面に拳が叩き込まれる、虚弱な彼の鼻の骨がオレ、鼻血が吹き出す。

「もういっちょ」

更にバランスを崩して倒れこんだ彼に膝を叩きこむ。とどめを刺そうとかかとで頭を踏み抜こうとする地和

「そこまでよ、やめなさい。二人とも」

その声は、長女である天和のものだった。
その一括に二人の動きは止まる。

「衛兵さん、一刀さんとこの屑さんを部屋まで運んで治療を施しておいてください」

ニッコリといつもと変わらない笑顔をする天和、最も目は笑っていない。
衛兵もそのなんとも言えない迫力に、気圧されしてしまう。

そして、衛兵に運ばれる白仲だが、笑っていた。
何が嬉しいのか分からないが、口元が醜く歪んでいた。

一方、青州を離れた袁紹は公孫賛の治める幽州に向かった。
しかし、戦においては公孫賛の騎馬戦術を前に翻弄されるばかりであった。
数で上回っているのに決して有効な戦いができていない、その様子を見つめ、金銀で飾られたゴージャスな鎧をした少女、袁紹は明らかに狼狽していた。

「ど、どうして公孫賛ごとき相手に苦戦しているの」

「そりゃあ、姫。先の戦いからずっと連戦続きで疲れているからじゃないのか」

頭がちょっと足りない文醜に正論を言われて、黙りこむ袁紹。
反董卓連合の失態の怒りを戦争にぶつけていたが、さすがにこの段階になると冷静になってくる。
そして、怒りが治まってくると、怒りのせいで忘れていた疲労も再び蘇ってくる。

「うん、ぶんちゃんの言うとおり。一度休んで、次の戦いこそ全力で行うべき」

文醜の意見に賛同する顔良。
猛将と言われているが、おとなしい性格をした少女で頭も周り冷静な判断ができる。

自分自身の連戦の疲労と、二人の仲のいい幹部の発言もあったのだろう。袁紹は大きく息を吸い。

「オーホホホ、公孫賛さん。あなたの命はしばらく預けておきましてよ。
みなさん、コレは負けではございません、優雅に撤退しましてよ」

そう言って高笑いをしながら撤退する袁紹。
公孫賛軍の兵の少なさもあって追撃こそされなかったものの、兵たちの足取りは重かった。

「何書いているんだ、白仲さん」

「手紙、おー、ワターシ、袁紹さん、サイコー、ゴージャス、マジビッチで裏切りますってな感じの文。それと、もう一通。
それより、軍の編成は終わったー」

鼻に大きな詰め物をしている白仲が怠そうに口を開く。
いつもの通りのボロボロの格好、そんな容姿、しかし、何故か一刀にはそれが何時もの白仲と同じ人間には見えなかった。

「終わったけど、本当に上手くいくのか」

「俺が軍を率いること？
自分でも向いてないと思うけどさ、できそうな人が他にいないからしかないじゃない。
小細工はちゃんとするから、まあ、がんばるさ」

「いや、そうじゃなくて裏切りのことだ」

「ああそれは、もちろん大丈夫。
オレは信用されていないし、ほら、三姉妹との仲も最悪じゃないか」
鼻に詰まっていた詰め物を抜き取り、見せつける。
一刀はヤレヤレと肩を竦めた。この人は自分の価値を下げるのをなんとも思っていない人だったね。

「じゃ、まずは公孫賛。
不思議だと思わないか？公孫賛が袁紹軍に仕掛けるという情報が入ってきた。
それなのに何故、公孫賛が防衛戦に回っているか、っと、コレはおいておこう。問題は次はどうなるかだね」
そう言われて一刀は考えこむ、次、自分が公孫賛だったらどう動くか。

「オレが公孫賛だったら、袁紹領に攻めこむ。騎馬隊は防衛に向かない、待ちに徹するよりも攻撃をすべきだからさ。
易京城が完成していたら別だけど」

「そう、あっちも攻めこむんだよ。
あちらさんだけ。……で、許してやるつもりは毛頭ないが」

そう言って、不敵に笑う。

「まあ、こんどこそ甘い妄想を考えて失敗しないように努力するよ。
ま、味方も多いし俺以上にそいつらに頑張ってもらうつもりだけど。
えっと、そして、そしてねえ」

「そして？」

「……必ず殺す」

その言葉を聞いた一刀は急に室内の気温が下がったように感じた。
アニキたちが生きていれば、また、古い付き合いである魯粛がこの場にいれば、こう言っただろう。

『うわあ、完全にキレてる』

逃げてばっかりの『他人を犠牲にすることに対して一片の躊躇ない正真正銘のクズ』が、他人を害するのに全力をつくす。
この事態がどれだけ危険であるかは言うまでもない。

休息に入った袁紹軍は攻勢に回った公孫賛軍に北から攻められるも、袁紹自ら指揮しそれを向かい撃つ。
領地に戻り兵力を回復させた袁紹軍は冀州という財力のある土地を最大限に利用した、装備、兵力の圧倒的な差から付け入る隙を与えない。
一方、冀州の東方・青州に本拠地のある張軍は、戦力を北部に集中させた時を狙い虎視眈々と袁紹領を狙っていた。

しかし、黄河の対岸である平原は袁紹軍が抑えている。
現在、黄河を挟んで対峙している、この状況において川が巨大な堀となっている両者攻める策はない。

だが、袁紹軍には余裕があった。

それは、寝返りの約束。
白仲が今夜、陣に火をかけるという内容だ
かの軍に対する情報は少なかったものの、白仲と言う将が超三姉妹とうまくいっていないことは間違いなかった。
先の戦いでボロ負けしているので、恐れて降伏する、という考えは理にかなっている。

もっとも、罠である可能性もある。
黄河の対岸に予備兵力を残し、船を使い敵陣へと向かう。

夜の闇を前にして黄河が赤く染まった、白仲が陣に火を放ったのだ。
それを見た、袁紹軍の将が兵を動かす。陣全体が燃え無ければコレほどまでの火力はないだろう

「もう必要ないからね」

逃げるための場所をなくし、背水の陣にする意味もある。
もともと自分には人望や実績が少ないので、士気を上げるための小細工は必要。
盛大に燃える火はこれらからの袁紹軍の行く末を表しているようだった。

「おい、次女、妖術の用意は」

「……も、もちろん出来ているわよ」

白仲の声に、青ざめた顔で地和は一瞬ビクリと震える。
大群を殲滅する大規模な術を使う準備は出来ている。

触媒や発動のための資材を得るのに苦労した。魯粛に返すはずのお金がまるごと使うことになった。
この場所にさえ差し込めば、最低でも万単位の人間を消滅させることが出来る。

一方、数万の人間を皆殺しにするのだ。
それを実行する少女が恐怖を覚えないわけがない。彼女の体がガタガタ震える。

「そうか、ありがとう。
各隊、対岸に上がってきた軍を包囲する用意を、
まずは、弓矢の雨を与えようか。格場所に隠れた弓兵は矢を放つ用意を生き残りを確実に殺すために」

まず一手、岸をわたり孤立した袁紹軍の包囲殲滅。

「そう、ちゃんと大掃除を」

まあ、死ねってことだ。

劉備軍はずいぶんカリスマに溢れた人間なんだ、と一刀は感心した
善政をしていた劉備という人望のある指導者、そして彼女が居ない
隙に領地を乗っ取った袁紹軍。

もし、平原の民が心のそこから劉備という人間を愛しているのなら、協力してくれる。

対岸が赤く染まる、あの場所では一方的な虐殺が始まっているのだろう。

白仲は兵を率いたことは少ない、縄で縛られて黄巾党の戦いを経験していないから当然である。

実質、ボロボの見た目通り弱い。

この世界には、見た目からは考えられない筋力の持ち主もいるが、そんなのと比べるまでもなく貧弱だ。人和あたりと喧嘩しても負けるだろう。

だが、一刀にはあの男が戦いで死ぬとは思えなかった。

そう、黄巾の乱が終わったある日の事だ。

白仲は治安維持のため盗賊を討伐することになった。

嫌がったがその時は軍縮の影響で人出が足らず、仕方なく引き受けたらしい。

幸運の女神に嫌われているのか、その盗賊は黄巾の乱の残党が集まって３０００人を超える大所帯になっていたのだ。

一方、白仲は１００の兵。一仕事終えた一刀はそのことを聞き、兵たちをかき集め援軍に向かった。

そして、敵が見えたので戦おうとすると、いきなり盗賊たちは泣き叫びながら降伏した。

一体どうしたんだろう？何があったか白仲に聞こうと向かった先にあったのは

「あれ、オレの旗？」
大量に立てられた自分を示す十文字の旗だった。
「一刀。虎の威をかる大作戦は成功したぞ。
盗賊だし、一刀のこと恐れているかなって思って、念のため用意しておいた旗が役に立ったんだ。セコイとか言わないように。
少ない人数で気付かれないように敵の拠点の裏側に回って、『はわわ、一刀の罠だ！！！』ってドラ流しながら叫んだら逃げていったよ」
「なるほど、オレが考えを読んだかのように逃げる方向に現れ、恐ろしくなって降伏したか。
でも、オレが居ないって気づかれたら終了じゃないか」
「気づく頃には、おまえが援軍として駆けつけてきているよ。他人頼りっていいね！！！」
「いや、威張らないでくれ」
他人だより、一刀はちょっと昔のことを思い出した。
そして、対岸から黄河を船が渡ってくるのを確認すると、表情を一気に鋭いものに変え
「平原のみんな、俺達に力を貸してくれ！！
全軍、今こそ敵陣に火を放て」
剣を掲げ、袁紹軍の陣へ平原の民たちと共に突撃する。
一刀は超三姉妹のマネージャーとして全国各地を回っていた。

ゆえに、地理、地形や人の流れ、そして、その土地の有力者はどうなっているか詳しい。
そんな彼が平原の『劉備に心酔』している有力者を見つけるのは容易く、袁紹軍の強行軍による略奪で不満を持つ彼らを仲間にするのは容易かった。

すなわち、平原に陣を置いている以上、袁紹軍は一刀の手の内にいるに等しい。

「次のことを考えると確実に倒しておきたいからね。
挟み撃ちにさせてもらう！！」

数千の兵と共に煙のように現れた一刀。彼の郡であることを示す特徴的な十文字の書かれた旗が風にはためく。
北郷一刀。張軍最強の将軍。数十倍の敵兵を無傷で幾度も倒し、負けを知らぬ。

黄巾の乱における異常なまでに多すぎる功績により、孫武に匹敵する（現段階では過大評価だが）と言われる武将である。

北郷一刀と白仲黒覇の率いる軍、その兵数、およそ４０００。
わずかそれだけの兵で、十数万と号する青州方面軍は一夜にして壊滅、いや、全滅した。
後の世で、『平原の戦い』と言われる戦い。史書には、山河には死体がならび、足の踏みどころすら無かったと書かれている。

この戦いで平原郡を奪い、その勢いのままに袁紹の本拠地冀州へと電撃のように攻め込む。
攻め込まれるとは思わず無防備であった平原郡の西に位置する清河郡を容易く奪い取った。そして、魏郡に位置する州都『業』へ向けて進軍の構えを見せる。

本隊は公孫賛と未だに戦っている、今青洲方面に救援に来ようものなら後方から追撃を受けて壊滅してしまう。
州都陥落の危機、業を守る守備兵たちは、数万の兵を持って清河郡へ向けて足を進めた。

「はい、これで詰みっと」

「白仲さんの読み通りだったな」

清河郡の城の中でぐったりと椅子の上に倒れ込んでいる二人。
先の戦いからの強行軍、住民の慰撫、物資の移動などをこなしていたのだ、疲労困憊に決まっている。

「オレの読みのお陰で助かったんじゃないよ、最初から筋書きを立てた奴がいるのさ。
そいつの盤状で盛大に踊っただけだ」

「董卓軍か、本当にうまいな。
公孫賛軍が攻めてくるっていう偽りの情報を流しただけで、『こう』動かすなんて、勉強になるな」

袁紹軍と公孫賛と戦わせ、青州を助ける
度重なる戦いで疲れていた袁紹軍相手なら奇襲に近い形で襲われても、騎兵の機動力で俺達とは違い防衛はできる。
その後、襲われた公孫賛は袁紹軍へと牙を向き、青州の張軍も何らかの動きを見せる。

それを目くらましにして、并州に進軍。状況によっては黄河を下り魏郡を狙う。

「お手紙を渡しておいたし、魏郡陥落は確実かな」

白仲たちを狙う袁紹軍も魏郡陥落の報を聞けば撤退するだろう。
次は戦わなくていいなあ。ひとまず、危険は去ったか。

「この情勢で行けば。
よし、やっと降伏できるよ。董卓軍っていうのが怪しいけど」

「董卓か。案外、いい人かもしれないぜ。
ライブのため并州の董卓の治める地に行った時、結構な善政を敷いていたのを覚えている」

「一応、袁紹軍の尻をぶっ叩いとくか。これだけアイツらのために尽くせば文句は言うまい
　頼んだ、一刀！！立派にゴマをすってくるんだぞ、応援だけしておくよ」

「あんたはヤラんのかい」

「ええーっ、万が一死んだらどうすんだよ！！
　おまえは死んでもいいが、オレは死にたくない！！」

メキョリと一刀の拳が顔面に突き刺さった。
危機が去って、白仲さんの様子もいつも通りのものに戻ってきたし、ハッピーエンドだ。

「ここまで上手くいくなんて」

冀州を攻めた呂布と陳宮からの手紙を見て、策がうまく行きすぎて賈？は呆然としていた。

ほとんど兵力の損失なく并州と冀州南部を得ることができた。袁紹軍は公孫賛、張軍、そして董卓の手により完全に滅んだ。

「うん、張三姉妹が味方をしてくれたのが大きかったと思う」

董卓がうれしそうに微笑む。

反董卓連合を結成され、敵だらけになって彼女は孤独だった。味方をしたのは同じ涼州の馬騰くらいだ。その彼女ですら、表面上は味方をせず裏で援助するだけだった。

それどころか、少数の兵と娘たちを反董卓連合に入れ、どっちに転んでもいいように布石をおいておいた。

だが、張軍は味方をせずに一貫して不可解な動きをして牽制をしてくれたのだ。そんな彼女たちが今回も味方をしてくれたのだ、嬉しくないはずがない

まあ、実際は単に金がなく金策にあえいでいただけなのだが

「こっちも危機を助けたし、狩りを返したってことなのかしら。それに、この手紙に書かれた臣従って言葉」

「え、仲間にするんじゃないの。詠ちゃん」

「勿論、味方にするわよ」

不思議そうに見つめる董卓に対して、ごまかすように笑う。

危険だ。確かにこっちの思惑通りうごいたけど、未だ味方にすべきか判断材料としては甘い。

一体どうすべきか。

「青州の自治を認めさせることにしない？正式な州牧の位を与えるのはどう」

「う、うん。わかった詠ちゃん」

そして、彼女が選んだのは放置。
もともと、領地が広がり人材が足りないんだ、臣従だけ認めて独立勢力として維持させる。
青州まで勢力を伸ばせば同時に戦線まで伸ばすことになる。そういった軍事的な意味合いもある。

それ以上に、曹操という怪物相手の餌として時間稼ぎになるだろう。
戦に負けて下手をしたら死ぬことになるけど、先の戦いで強さは折り紙つき。将の一人や二人巻き添えにしてくれるかもしれない。
いえ、先の戦いの強さを見ると死んでくれる方がありがたいかも。

「大丈夫、月は私が守るから」

賈駆の瞳に宿った炎。
一瞬、過ぎった暗い光。それは董卓の心に不安をもたらすには十分だった。

「と、いわけで、州牧になってね」

「……（　。д。）、ｗｈｙ？」

どうしてこんなことになっているのでしょう。

「えー、だってー。アイドル巡業と州牧の仕事を一緒にはできないし」

天和がにこやかに声をかける。

ビッチ仕事しやがれ、そのたわわに実った乳は世の男性を侍らかすことに役立つんだ。オレなんかより権力を使うのには向いているだろう！！

そういや会議場には、下の二人の妹がいないなあ。近頃、オレの顔を見るだけで逃げるようになった。

どうせモテねーよ！！顔も見たくないほど出来損ないの顔だってか！！悪かったな。

「そうだ一刀はどうした！

アニキたちが死んで推薦者がいないのは確かだけど、一刀の実績は十分。オレよりか上だろう」

「えー、一刀が州牧になったら、マネージャーとして一緒にいることができないよー。

それに今の地和ちゃんたちの状態を考えるなら、一刀の支えが必要だから」

ウッセー。

黙って、一刀のチンコでも食ってろ！！
そ、そうだ、一刀だ。一刀なら何とかしてくれる。

「州牧に推薦したのはオレだ！」

「こ、この裏切り者！そ、そんなに巨乳がいいの、バカ、バカぁ」

「気持ち悪い声を出すな」

一刀の右ストレートが容赦なく、白仲の顔面に突き刺さった。
何だろう、このごろ一刀のオレに対する扱いがぞんざいになってきている。コレが反抗期なのだろうか。
しかし、殴られるのが時々気持ちよく。

……あぶねえ、ホモやない、ホモやないで。
女性に殴られた時のほうが気持ちよかったから、俺はホモじゃない。
健全な男性なのだ！！
しかし、この才能（何のだよ！）。一刀、恐ろしい子。

「白仲さん先の戦いで大陸中に名前が売れたのはわかっているよな？」

一刀の言葉に白仲は首をかしげた
先の戦いなんて、董卓と公孫賛、そんでもって劉備が味方のようなもので、なおかつ賈駆さんがシナリオを書いたのですが。
アイツらの力を利用しただけで、俺自身は全く何もしてないんだよ。
それに一番人殺したのは次女じゃん。

「少しだけオレが名を売れるように情報流したけど」

「え、なにそれ」

「俺も白仲さん名前が売れた。いい加減に戦いと役満シスターズを分けることを始めようと思うんだ。
それを置いても、基本方針を決めたのは黄巾党の戦いも、今回の戦いもあなただ、白仲さん。指導者としてふさわしいのはあなただろう」

「受けるしか無いか」

一刀に言葉に仕方がないといった様子でうなずく。
ちっ、逃げるか。
今夜あたり早速荷物をまとめて、魯粛の借金があるけど。
倉庫にある袁紹軍から奪った財宝や宝剣と今年度分の予算を合わせれば足りるはず、倉庫から盗み出して臧覇あたりに移動を協力してもらって。

「今、気づいたんだけどオレさ、事実上、軍部と隠密支部を支配しているんだよね。
嘘ついたらどうなるか分かるよな」

「男、白仲黒覇。州牧の位、誠心誠意努めてもらいます」

白仲はこう言うしかなかった。

なあ、みんなは『やっちまった』って後悔するときはあるかい。

どんなに怒りに包まれた時でも、まずは一杯のお茶を飲んでから行動をしてみるといいよ。

いくら悔やんでも時間は元に戻らないからね。

そう言えば、良いこともあったよ。聞いてくれるかな？
借金の返済が遅れることを魯粛に手紙で知らせたんだ。アニキが死んだからかな？なんと認めてくれることになったんだ。
少し変なことを書いていたけど、内容は。そう、こうだ！！

『兄上のことは残念だった。借金のことは気にしなくていいよ、まあ、それくらいの分別は私にもある。
それに、いま、借金を返しに来たら近頃出没している虎にミンチにされていたところだ。
残念ながら君の書いた手紙の匂いを嗅いだだろう。

ps、夜道には気をつけてね、お願いだから』

虎が出没しているなんて大変だな、魯粛も。

やっちまった（後書き）

今回はちょっとシリアスに書きすぎたような、うん、修練が足りないなあ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1187ba/

恋姫？ハイハイ、童貞乙

2012年1月6日18時53分発行